

1995年6月6日李仁夏氏講演主旨
アジアの人々との和解

－戦後50年を迎えて－

加山 久夫

明治学院では去る6月、学院長名による戦争責任・戦後責任の告白、元アジア人留学生を迎えてのシンポジウム、60余名の有志教員による関連テーマの授業など、いくつかのプログラムが集中的にもたれたが、キリスト教研究所主催の上記講演会はその一環として企画されたものであった。

李仁夏氏は15歳の時、植民地化されていた母国で勉学を続けられ

なくなり来日、戦時下で皇民化教育の洗礼を受けた。氏は模範生として日本人以上に日本人になろうとしたという。そのような中で、ひとりのクリスチャン教師に出会い、キリスト教に入信。もうひとつの洗礼を受けたわけである。しかし、戦後、これまでの生き方に挫折を感じた氏は牧師になる道を選び、その後、36年間の長さにわたり在日大韓基督教川崎教会の牧師として、地域社会における民族差別と闘いつつ、やがて川崎市を日本人と在日の共生の一つのモデル市にするうえで実に大きな働きをしてこられたのであった。それだけでなく、日韓両キリスト教会の橋渡しとして指導的な役割を果たすとともに、在日韓国人・朝鮮人の声を日本人に伝える働きもしてこられた。

「戦前・戦中、日本は何をしてきたか」、そして「戦後、日本は何をしてこなかったか」について、李先生はこの日も率直かつ具体的に語られるとともに、まだ手にしていないアジアの人々との和解こそが日本にとって不可避の課題であることを語られた。そのために、まず詫び、相手に和解を求めなければならない。「あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感をもっているのをそこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい」（マタイ5：23, 24）と語ったイエスの言葉をわれわれは想起しなければならない。日韓両基督教会や川崎市に

おける日韓両民族の出会いの場を形成するなかで、実際に和解の出来事を目撃してこられた李先生の言葉は、われわれに励ましと希望を与えるものである。

戦後50年を迎えて、これからいかにアジアの人々と共に生きるのか、日本（人）はいま問われている。

（かやま ひさお
所長、一般教育部教授）